

資料紹介

流転の前島密像

—現存する立像と胸像について—

井村 恵美

① はじめに

2021(令和3)年4月20日に郵便事業は創業150年を迎える。これまで記念の際は「郵便創業の父」前島密の切手がしばしば発行されてきたが、初めてその姿が表されたのは通信省前に建立された立像で【図1】、戦後初の切手にも立像が採用されている⁽¹⁾。【図2】。前島密の銅像は立像のほか、胸像も制作されたが、いずれも寿像の制作から約百年を経て、流転するかのように数回にわたり移設された。また、胸像は後代に同型多種が制作され、文献記録と現在の所在などの乖離が生じており、情報が錯綜しているのが現状だ。

そこで本稿では、前島密の立像と胸像の履歴を整理し、現代に受け継がれた前島密像について当館の資料を中心に検証する。

② 立像(洋装、フロックコート姿)

(1) 制作経緯

前島密の銅像で有名なのは、通信省前に設置された立像⁽²⁾だろう。1円切手とともに前島を語る上でシンボリックな存在である。

この立像は、通信事業に貢献した偉人として1916(大正5)年に通信省庁舎前庭に建立されたが、寿像建設については『鴻爪痕』⁽³⁾に記録がある。

[引用]

翁は元来高寿を祝せらるゝ様なことが大嫌ひの人であつた。其人が寿像の建設を大なる満足で迎へたといふに就ては固より動機がある事で、大正三年の一月十一日に、翁は八十歳の高齢に達せられた故を以て天盃を拝受するの栄を得られた。之を機会として平生から翁に勤めて居た人々が是非にと翁を動かした結果で、翁も実際の事であるから喜んで其意を

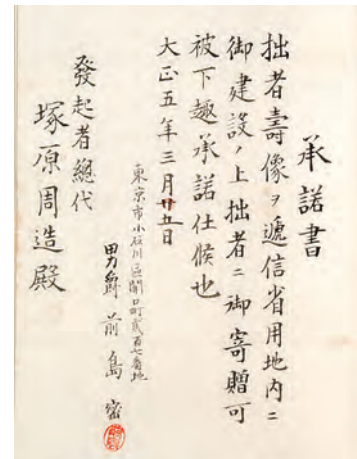


【図1・2】
「郵便創始50年記念」、1921
(T10). 4.20発行、
「郵便創始75周年記念」、
1946 (S21). 12.12発行

- 1 【図1】は1921年4月20日に郵便創始50年の式典を記念して発行された。功績者前島密の銅像と通信省庁舎を描き、創業年にちなみ星章50個を配している。【図2】は終戦後最初の記念切手。
- 2 現在は前島記念館(新潟県上越市)の前庭に建つ。
- 3 「二. 後半生録」『鴻爪痕』株式会社鳴美、2017年復刻版(1920年初版)、211-212頁、「12 寿像建設」に記載。

容れられた訳であるが、それは大正四年十月八日夜を以て築地精養軒に開かれた寿筵の席上に於て始めて纏まつたのであつた

このとき渋沢栄一、塚原周造ら17人が発起人となり寿像建立が決し【図3】、さらに建設経費も募ることができている。その後本像は、災害や戦争など時代に翻弄されるように幾度も移動を余儀なくされた。次にその経緯について整理したい。



【図3】「男爵前島密寿像建設関係書類綴」中「承諾書」8101-G-03-01、1916 (T5).3.25

(2) 立像の移設経緯

① 通信省庁舎時代（京橋区木挽町）

立像は、1916（大正5）年7月1日、通信省本庁舎前に設置された。彫像は新海竹太郎⁽⁴⁾、台座は伊東忠太⁽⁵⁾が担当。前島夫妻も参列し盛大な寿像除幕式が挙行された【図4、5】。しかし1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災で庁舎が瓦解し敷地内の再整備のため、寿像は震災の損傷がなかった飯田橋駅前の通信博物館⁽⁶⁾に移設された。



【図4】「前島密翁寿像除幕式参列者2-1」WBE-2、1916 (T5).7.1。中央に大隈重信、前島密、仲子（夫人）。渋沢栄一らが参列

② 通信博物館時代（麹町区富士見町）

1926（大正15）年3月11日、台座とともに通信博物館前庭に移設され【図6】、多くの来館者を出迎えてきたが、戦時中の金属供出⁽⁷⁾で撤去が決まったため、通信院⁽⁸⁾により代替像（石像）が発注され、戦後まで博物館前庭に設置された。代替像の詳細については次項に記す。

一方、オリジナルの立像（銅像）は鑄つぶされず生還したため、前島記念館に移設が決まった。

③ 前島記念館時代（新潟県高田市）

オリジナルの立像（銅像）は、前島記念館前庭の胸像（長沼守敬作）と交換することが決ま

4 新海竹太郎（1868-1927）、彫刻家。ドイツ留学を経て日本の近代彫刻の先駆者として数多くの作品を手掛ける。
5 伊東忠太（1867-1954）、建築家。工学博士として後に東京大学名誉教授となる。日本建築史を創始。
6 井上卓朗、資料紹介「郵政資料館所蔵資料紹介」、『郵政資料館研究紀要』創刊号、2010年、96-97頁。補足説明：その後2013年8月31日に「通信総合博物館」閉館、2014年3月1日現地に移転、「郵政博物館」に改称。
7 金属類回収令（1943年8月12日〔勅令第667号〕）
8 1943年11月1日、通信省と鉄道省が合併し運輸通信省を設置。通信省の所管であった郵便・貯金・保険・電信・電話事業は外局の通信院所管となる。通信院官制（1943年11月1日〔勅令第831号〕）



【図5】「前島密翁寿像（通信省前庭）」WBC-1、1916（T5）.7.1



【図6】「前島密翁銅像 3-3（通信博物館前庭）」WBC-7、1930（T5）.1.17



【図7】「前島密翁銅像（前島記念館）」WBC-21、1955（S30）.4.12

り胸像は東京の郵政省へ、立像は1947（昭和22）年10月5日に移設され現在に至る【図7】。

(3) 代替像（石像）の存在

①通信博物館時代（麹町区富士見町）

オリジナルの立像（銅像）の撤去を前に、通信院が「日本硬化石美術工業所」に依頼。セメントを主とした代替像（石像）が完成した【図8】。制作年代については、①1944（昭和19）年6月に設置⁽⁹⁾②1944（昭和19）年3月に、通信院は代替像（石像）の制作を開始。同年5月に竣工⁽¹⁰⁾という二通りの記録があるが、現時点ではどちらが正確な記録か確証がとれなかった。

代替像は原像から型取りをして制作したため、いささかも変わらない出来栄えだったということで大切にされたが、1951（昭和26）年に同館郵便局の拡張工事のため撤去となり中央郵政研修所⁽¹¹⁾に移された。

②中央郵政研修所（下国立市）

1954（昭和29）年9月27日、中央郵政研修所校庭において移設された代替像（石像）の除幕式が開催され、隣接する講堂は前島講堂と名付けられた。現在、同地の前庭にある立像はシルクハットやステッキを携えておらず、姿が異なる別の像である。台座銘板等の記録から1992（平成4）年に設置されたものと判明した。

開所当時の代替像の所在は不明だが、セメントが主材料で物資乏しい時期に制作されたもの



【図8】「前島密翁石像（通信博物館前）」WBC-18、1944（S19）.5カ?

9 前掲書『鴻爪痕』238頁。

10 [写真資料保管票（通信博物館）] WBC-10「前島密石像除幕式」4-1に「銅像撤収並代替像竣成修祓式。代替像＝原銅像から型取りし、人造石を用いた。日本硬化石美術工業所製作。昭和19年3月下旬着工。同年5月竣工（総工費1,750円）。本銅像＝大正5年7月1日竣成寿像除幕式報行「身長11尺5寸台座共20尺」通信省前庭（原型 新海竹太郎、台座設計 工学博士伊東忠太）昭和16年6月5日大東亜戦下における銅、鉄資源回収のため献納撤去した」と手書きで記載がある。

11 1954年3月「中央郵政研修所」と改称。1943年4月に設立された通信官吏練習所国立分室がルーツ。現在は中央郵政研修センター（東京都国立市）。

であることから屋外での風雪に耐えられず、劣化に伴って撤去された可能性もある。それを裏付ける一例として【図9】がある。台座の銘板を取り外した記録写真だが、履歴が中央研修所での記録となっているので銅像と台座を撤去した時のものと考えられる。



【図9】「銅像銘文」WBC-15、1968(S43)撮影、中央研修所の写真として記録あり。

③ 立像（和装、衣冠束帯姿）

前島密の立像には、衣冠束帯姿の小像もある。現在、前島の墓所であり、如々山荘⁽¹²⁾があった浄楽寺の前島密夫妻の墓標上部に設置されている【図10】。新海竹太郎の手によるこの小像については、如々山荘の一角に建てた翁の小銅像の下に仲子夫人、前島密の遺骨を埋葬した⁽¹³⁾と『鴻爪痕』にある。現在は墓所にあるが当初は敷地内に設置されていたのだろうか。前島密は1917（大正6）年に仲子夫人が他界した折、墓所を浄楽寺に決めたとのことである。小像を手掛けたのは、通信省前の立像と同じく新海竹太郎である。銅像建立時に余剰金が出たため、前島は衣冠束帯姿の小さな像を数体ほど新海に依頼して作成してもらい、お礼として近親者に配布した。その一つを墓碑に載せたそうである⁽¹⁴⁾。

装束については、葬送の様式と合わせて複数枚残る前島密自筆の「遺言」【図11】の下書きにも記されている。死装束は正装で、烏帽子、直衣を用いて欲しいといった指示が記載されており、通信省前の洋装の像と対極の和装礼装を希望したことがうかがえる。

また、墓についても言及しており墓は不要、例えば自身の銅像の下に遺骨を納めるようにと記されていることから、この小像は前島の意思を反映したものといえる。ただ、実際の小像は、和装礼装ではあるものの衣冠束帯姿である。



【図10】「前島密翁墓所」WBE-26、1955(S30).9.16



【図11】「遺書（下書）」WA-B1-20-3、1914(T3).9

④ 胸像の経緯

ここまで立像について整理したが、前島の姿を写した最も古い作品は胸像だ。オリジナル第

12 前島夫妻が晩年を過ごした山荘。浄楽寺敷地内（神奈川県横須賀市）にあった。

13 前掲書「二、後半生録」『鴻爪痕』223-224頁、「13 隠退と晩年」に記載。

14 『没後百周年記念 前島密と横須賀西海岸』、おおくすエコミュージアムの会、2019年、8頁。前島夫妻の墓塔について。



【図12】「記念館と胸像」WBC-4、1936（昭和11）年8月2日



【図13】「前島密翁胸像」
WBC-24、1952
(S27).4.20、(郵
政省正面玄関ホール)

一号の胸像は、長沼守敬⁽¹⁵⁾が手掛けた青銅像である。この像は前項（2-2）③項で前島記念館前庭にあった胸像【図12】が郵政省の玄関ロビー【図13】⁽¹⁶⁾に移設されたものだが、長沼守敬の銘がないことに加え、後に制作された同型が存在するほか、本省移転などの要件が重なり前島胸像についてどれがオリジナルなのか確証が得られなかった。本像が長沼作品として裏付けられたのは、大阪芸術大学教授石井元章氏の調査⁽¹⁷⁾によるものである。

胸像は複数体あるため、本稿では便宜上長沼守敬作を「長沼版」、その後補綴改鑄により会田富康が手掛けたものを「会田版」として分類する。

(1) 長沼版

①制作経緯

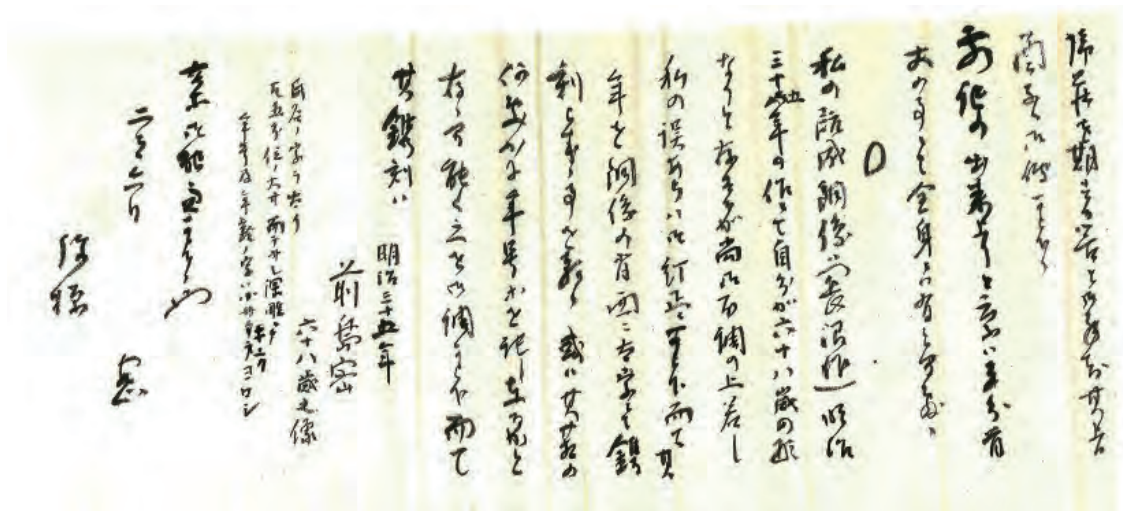
前島密の胸像について、『鴻爪痕』の「先生の寿像のその後」に「先生が男爵を授けられた明治三十五年に、東京美術学校彫刻科教授長沼守敬氏の作った胸像が建てられていたが、これは撤去されて、今郵政省の玄関をはいつた正面に飾られている」と記載されている。経緯については明らかなが、制作年代については文献や銅像背面の線刻を突合すると5年間の乖離がみられる。制作年代に関する記載は、『鴻爪痕』のほか前島の自筆書簡でも明治35年であるという。

〔翻刻（【図15】の○以降）〕

私の既成銅像ハ（長沼作）明治三十五年の作にて自分が六十八歳の頃なりと存ずるが、尚御取調の上若し私の誤あらハ御訂正ニ可被下。而て其年を銅像の背面ニ太字にて鐫刻被成候事を願候。或は其苑の何處かに年号等を記し在るかと存候間。能く之を御調可被下。而て其鐫刻ハ 明治三十五年 前島密 六十八歳之像 自分ノ字ヲ太ク凡五分位ノ大サ、而テサレ深彫シテ年号及年齢ノ字ハ小サキ方ヨロシ。右等御配慮可被下候也。二月六日 密 弥 様

ただ、長沼版の銅像本体背面【図15～19】には、「前島密 明治四十年六月二十四日鑄造」

-
- 15 長沼守敬（1857-1942）、彫刻家。イタリアに留学し、東京美術学校彫塑科初代教授に就任。胸像など本格的な西洋式の新しい彫刻を手掛け、受賞歴も多く海外でも高く評価された。
- 16 現在は、社屋移転にともない、日本郵政株式会社本社ビル3階（東京都千代田区大手町）に設置されている。
- 17 石井元章「長沼守敬に関する包括的研究」、2016年、11-12頁。2018年2月18日、大阪芸術大学で開催されたシンポジウム「長沼守敬研究の地平」報告。『近代彫刻の先駆者 長沼守敬：史料と研究』中央公論美術出版社、近刊。



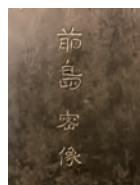
【図14】 [8101-0571-A]「前島密遺品」中、8101-571-15前島密長男弥あての書状文末（部分）、1916 (T5).2.6

と刻まれている。1907（明治40）年は前島密にとって特筆すべき出来事はないが、1902（明治35）年は男爵を拝受するなど祝うべき出来事があり記録も多い。本人も68歳の姿を写したものであると覚えていることから、私見だが、発注や制作開始が明治35年、銅像の完成は明治40年ということと推察する。

【図15】 ①②



【図17】 ①②



【図16】 ①②③



【図18】 ①②③



【図15】 前島密像、青銅像（長沼守敬作、日本郵政株式会社本社3階、東京都千代田区大手町）①背面線刻②正面

【図16】 前島密像、着色石膏原型（長沼守敬作、郵政博物館資料センター1階資料室(1)、千葉県市川市香取）①原型底面②背面線刻③正面

【図17】 前島密像、青銅像（長沼守敬（カ?）、日本郵便株式会社東京支社1階、東京都港区赤坂）①背面線刻②正面

【図18】 前島密像、着色石膏原型（長沼守敬作、郵政博物館資料センター2階資料室(2)、千葉県市川市香取）①原型底面②背面線刻③正面

②設置経緯

現在日本郵政株式会社本社にある「長沼版」【図15】は、そもそも1931（昭和6）年11月17日に前島記念館の開館に併せ同館前庭に建立され、1952（昭和27）年4月20日「逓信記念日（現在の郵政記念日）」に当時郵政省があった飯倉片町へ。その後1969（昭和44）年7月に霞が関への本省移転に伴い移動、さらに2018（平成30）年日本郵政株式会社本社移転で現地に設置されている。ちなみに同社社屋には2体の前島胸像があり、オリジナルが3階、鋳造による複製が2階に設置されている。

③種類

現在確認できている「長沼版」は表1のとおりである。青銅像と着色石膏原型があるが、青銅像【表1-1】【図15】と着色石膏原型【表1-2】【図18】がセットと考えられていた。しかしこのたび筆者が背面の線刻の書体を詳細に確認したところ、二種あることがわかった。顕著な差異は、前島の「島」の書体で【表1-1、1-3】【図15、16】が対応する（A型）。さらに【表1-2、1-4】【図17、18】が対応すると考えられる（B型）。これまで同社東京支社が保管する前島胸像は、本社の前島胸像と混同され詳細が明らかではなかったが、この書体の一致から石膏原型との関係性が見えている。

No.	作品名	形状	設置場所（所在地）	背面等の線刻	線刻型
1	前島密胸像	青銅像、胸像	日本郵政株式会社本社3階	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造	A
2	前島密胸像	着色石膏原型	郵政博物館資料センター2階資料室(2)	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造	B
3	前島密胸像	着色石膏原型	郵政博物館資料センター1階資料室(1)	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造	A
4	前島密胸像	青銅像、胸像	日本郵便株式会社東京支社1階	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造	B

▲【表1】 前島密の胸像《長沼版》 *長沼版は、日本郵便株式会社支社等に設置の可能性あり（未調査）。

(2) 会田版

①制作経緯と種類

会田版には、いずれも背面に「前島男爵ノ命ニ依リ、密翁ノ像ヲ補綴改鑄ス。昭和十二年四月 会田富康」と刻まれている。ここでいう前島男爵は長男の弥である。弥が何らかの記念で父の銅像の制作を会田に依頼し、それが複数体現存している【図19、20】。「長沼版」に加え、「会田版」も何体発注しどこに設置したのかを示す資料は探し当てることができなかったが、全国に複数体あることがわかった。現在筆者が現地調査により確定



【図19】「前島密翁胸像 68歳」（逓信博物館内）、「前島記念室」模様替後、WBC-1、1961（S36）. 1.25



【図20】「前島密翁胸像除幕式」（日本橋郵便局）、WBE-27、1962（S37）. 4.26 撮影

できた会田版は以下の2体である【表2】【図22、23】。

No.	作品名	形状	設置場所（所在地）	背面等の線刻
1	前島密胸像《補綴改鑄》	青銅像、胸像	郵政博物館（展示場）	前島男爵ノ命ニ依リ 密翁ノ像ヲ補綴改鑄ス 昭和十二年四月 会田富康
2	前島密胸像《補綴改鑄》	青銅像、胸像	日本橋郵便局	前島男爵ノ命ニ依リ 密翁ノ像ヲ補綴改鑄ス 昭和十二年四月 会田富康

▲【表2】 前島密の胸像《会田版》 *会田版は、日本郵便株式会社支社等に設置の可能性あり（未調査）。

【図21】 ①②



【図22】 ①③



【図21】 前島密像、青銅像（会田富康作、郵政博物館常設展示室、東京都墨田区押上）
①背面線刻②正面

【図22】 前島密像、青銅像（会田富康作、日本橋郵便局、東京都中央区日本橋）
①背面線刻②正面

しばしば混同される「長沼版」と「会田版」だが、長沼が手掛けた彫刻の特徴に加えて、顕著な差異の一つに蝶ネクタイのサイズが挙げられる。石井教授の調査で前者は大きく、後者は小さいことがわかった。

②設置経緯

1955（昭和30）年11月1日、通信博物館第6展示室を模様替えし「前島記念室」を新設【図23】した際に設置した胸像が【表2-1】【図19】である。この胸像に関する当館の「写真資料保管票」[WBC-22／前島密胸像（68歳）]には、「前島記念館前に設置した胸像（現郵政省にあり）と同じく長沼守敬制作のもの（昭和59年現在歴史コーナーにあり）」と記載されている。モノクロ写真の情報だけだが、①蝶ネクタイのサイズ②収蔵履歴などから本像は「会田版」であり、筆者は保存票の記載は誤りであるとする。



【図23】 「通信博物館内陳列室」（前島記念室）、WAB-94、1955（S30）.11.10撮影

（3）長沼版と会田版の収蔵経緯

当館で収蔵している胸像については【表3】のとおりである。昇降順は収蔵の時系列とした。そのほか、前島密ゆかりの地や日本郵政グループの施設には「長沼版」や「会田版」のほか後

No.	作品名	形状	設置場所（所在地）	履歴
1	前島密胸像 《補綴改鋳》	青銅像、胸像	郵政博物館展示場	会田富康が1937（昭和12）年4月に前島男爵（密長男の弥）の命で改鋳。1955（昭和30）年11月1日「第6展示室」を「前島記念室」として遺族寄贈等の資料群を展示した中にある胸像と考えられる。
2	前島密胸像	着色石膏原型	郵政博物館資料センター 1階資料室 ⁽¹⁾	1とともにすでに当館に収蔵されていたと思われる。詳細は不明。
3	前島密胸像	着色石膏原型	郵政博物館資料センター 2階資料室 ⁽²⁾	依頼により当館職員（通信総合博物館時代）が、市ヶ谷近辺に本資料を受取りに出向いた。以後収蔵庫にて収蔵。
4	前島密胸像 《複製》	第二原型	郵政博物館資料センター 2階資料室 ⁽²⁾	2019（平成31）年4月20日「郵政記念日」に新社屋落成、前島密生誕100周年、前島ホール開所を記念して設置した像の第二原型。

▲ [表3] 前島密の胸像《郵政博物館収蔵》

世に新設された多くの前島の像が存在しているが、詳細な調査は行えていないため現在わかる範囲についてのみ記載し本稿末 [表4] に掲載する。

(4) それ以外の胸像

「長沼版」「会田版」以外にも [表4-Ⅲ] のとおり、前島密にゆかりのある地【図24】などに胸像が数多く現存している。その多くは日本郵政グループの関連施設になるが、近年の事例としては同社の発注により当館収蔵の長沼版着色石膏原型から型取りし、鋳造で作られた複製の胸像 [表4-Ⅲ7] 【図25】などがある。全国にまたがる前島の銅像について、郵政博物館の課題として今後とも継続的な調査を進めたい。



【図24】 前島密像（JR磐田駅前南口ロータリー）、2019（R1）撮影



【図25】 前島密像、第二原型（【図19】から型取りしたもの。現在は資料センター資料室⁽²⁾で保管）

5 おわりに

さて、記録にもあるように前島は万事に於いて華美を嫌い、清貧の思想をもっていた人物であったことは殊に寿像に限らず散見できるが、いざ制作となれば芸術にもポリシーがあったようで、彫刻家新海竹太郎の取材記事や前島密の手稿にその断片が残されている。前島から長男弥にあてた書簡の中に寿像の制作にかかわる記述【図26】があり、そこには如々山荘に赴いた新海から前島に対して、なんとしても事前に仕上がりをチェックしてほしいと依頼があったことが記されている。新海本人の心配が伝わってくるようだ。

新海竹太郎によれば、フロックコート姿【図27】は前島の希望によるもので、それ以外は一任するとのことだった。しかしながら、前島は新海に対して美術書を片手に銅像に関する芸術論を

交わっていたようで、銅像とは、写実に忠実であるだけではだめで、全部に於いて統一したその人の感じを得るものでなくてはならない⁽¹⁸⁾という趣旨を伝えている。そんな期待に応えるべく、前島本人の姿を写すことに作者も熟慮を重ね、銅像としての格好の良さや美しく仕上げることも、前島の持つ内面や雰囲気醸し出すよう技巧的な部分にも工夫を見せている⁽¹⁹⁾。

〔引用〕

前島男の銅像の地肌はワザと一見粗雑な風に仕上げました。之も普通に見る如く滑かに光沢を持たせると、綺麗であるが、屋外に建立する銅像の如きものとしては、地肌を滑かならしめると、光沢の関係上強く光る部分と暗く陰を持つ部分とが著しく目立つて来て、何となく剛い堅い感じを起させますが、斯様に地肌を粗雑ならしめると、明暗の区別が目立たないので柔かいフワリとした感じを起させて、自然に近いから面白いと思つたからなんです

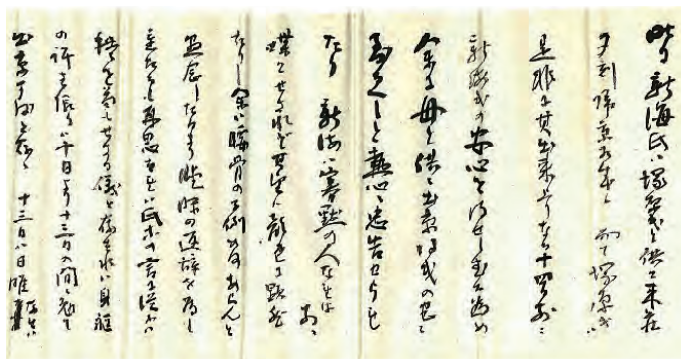
前島の立像は、ザラリとした質感が印象的で、顔や姿に強い日の光と影を落とさない。高い台座上にあるが、自然な佇まいで威圧感を与えない。静謐さや帽子を携える自然なしぐさと合わせ、前島密という人物の生前の姿をよく伝え、ある種の親しみやすさを生むことに成功している。

新海竹太郎、長沼守敬という二人の偉大な芸術家の手によって映し出された前島密。両像は、作家が生前の前島本人と言葉を交わし、雰囲気を感じ取って制作した寿像であり、その姿はカタチとしての像にとどまらず、前島密の人物像を今に伝えている。戦争や災害、時代の波の中で流転するかのように転々とした前島像、そして数多くの前島像が全国各地に建つ様は、青年期に日本全国を駆け巡り、明治新政府においては日本を網羅する通信制度の礎を築いた前島密そのもののようでもある。

日本中に足跡を遺した前島密——。郵便創業150年を経てなお人々に親しみ愛され、郵政事業のシンボルとしてこれからも存在し続けることを心より願う。

〔謝辞〕

本稿の執筆のきっかけをつくってくださった大阪芸術大学教授石井元章氏、日本郵政グループへの調査のご協力を



【図26】 [8101-0571-A] 「前島密遺品」中、8101-571-15、前島密長男弥あての書状文頭（部分）、1916（T5）.2.6



【図27】 「前島密翁御夫妻と長男弥氏御夫妻」WBB-44、年代不明。長男弥、前島夫妻（密、仲子）、西子（弥夫人）。前島密フロックコート姿

18 前掲書『鴻爪痕』、340-341頁。

19 前掲書『鴻爪痕』、342-343頁。

賜った日本郵政株式会社岡本次郎氏、前島書簡を発見した当館主任資料研究員田原啓祐氏に御礼申し上げます。

〔凡例〕

- *当館の名称については、便宜上、前身である「逓信博物館」「逓信総合博物館」を書き分け、現在の施設名称は展示、収蔵施設の所在地が異なるため「郵政博物館」「郵政博物館資料センター」と別に記した。
- *銅像の移動履歴については、当時の施設名称、所在地表記のままとし、現名称及び住所表記は〔表4〕に記した。

I. 前島密立像

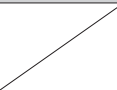
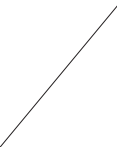
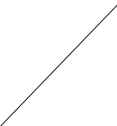
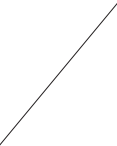
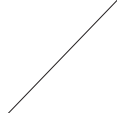
No.	画像	作品名	形状	作者	特徴	所在地	来歴	背面等の記録
1		前島密立像 (複製像)	青銅像、立像	新海竹太郎 (立像)、 伊東忠太 (台座)	フロックコート (洋装)、向かって 左手にステッキ、 右手にシルクハット	①逓信省本庁舎 前庭 (京橋区本町) ②逓信博物館 前庭 (麹町区富士見町) ③立像は金属供出のため 台座から取り外し→ 戦後返納 ④前島記念館 前庭 (新潟県上越市下池部)	1916(大正5)年3月11日逓信省 本省庁舎前庭に設置。1923(大正 12)年9月関東大震災により本省が 焼失したため、無傷だった逓信博物 館前庭に移設。戦時中の金属供出で 銅像を撤去。一時代替像を同館前に 設置。溶解を免れた銅像は、1947 (昭和22)年10月5日前島記念館 に移設。現在に至る。	台座に記載 男爵前島密君 元驛通総監前島密君壽像記 明治逓信之政君所創基経緯 中外 脉絡貫通今慈齡八旬又二考 般西 浦□然忘世□故食日功績永 不可 忘於是□銅像壽諸省庭大正 五年 丙辰夏五月
2		前島密立像 (代替像)	石像(セメント主材料)、 立像	日本硬化石 美術工業所	フロックコート (洋装)、向かって 左手にステッキ、 右手にシルクハット	逓信博物館(麹町区富士見町)中央郵政研究所(現在の郵政大学と中央郵政研修センター/東京都国立市西)	《代替像》は原銅像から型取りし、 人造石を用い、1944(昭和19)年 3月着工。同年5月竣工。総工費 1,750円で制作された(1943年撤去、 代替像設置の記録もあり)。1954(昭和 29)年9月27日、現東京都国立市 に新設された「中央郵政研修所」 校庭に移設。現状調査中。	同上
3		前島密立像	青銅像、立像	峯田義郎	フロックコート (洋装)	郵政大学と中央郵政 研修センター(東京都 国立市西)	原像から型取りして制作された代替 像とは別の立像。	台座背面に「□. MINETA' 92」の銘
4		前島密立像 (小型像)	青銅像、立像	新海竹太郎	衣冠束帯	浄楽寺墓所前島密墓石 上部(神奈川県横須賀 市芦名)	逓信省前設置の寿像経費の余剰金で 小型の本像を数点制作。近親者に配 布した。そのうちの一つが現在の墓 標上段にある像。	大正6年 新海竹太郎作
5		前島密立像 (小型像)	青銅像、立像	新海竹太郎	衣冠束帯	前島記念館展示室(新 潟県上越市下池部)	逓信省前設置の寿像経費の余剰金で 小型の本像を数点制作。近親者に配 布した。そのうちの一つが現在の墓 標上段にある像。	大正6年 新海竹太郎作

II. 前島密胸像

No.	画像	作品名	形状	作者	特徴	設置場所(所在地)	来歴	背面等の銃刻
1		前島密胸像 (オリジナル)	青銅像、胸像	長沼守敬	銅像と別注の台 座あり。会田富 康作より蝶ネク タイが大きい。	日本郵政株式会社本社 旧社屋1階(東京都 千代田区霞が関)→ 《2018(平成30)年本 社移転》→新社屋3階 (東京都千代田区大手 町)	1902(明治35)年、長沼守敬に依 頼して作成した胸像。逓信博物館前 の立像(Ⅰ-1)が前島記念館に移 設となったため、前島記念館にあっ た本像を郵政省本省に移設(「鴻爪痕」 記載)。	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造
2		前島密胸像	青銅像、胸像	(当館未調査)	(当館未調査)	上越市立雄志中学校 (新潟県上越市下池部)	(当館未調査)	(当館未調査)
3		前島密胸像	着色石膏原型	長沼守敬	着色・黒色、本 体部分眉上、 ジャケット襟下 欠損あり、銅像 と一体型の台座 あり、蝶ネクタイ 大。	郵政博物館資料セン ター1階資料室(1)(郵 政博物館収蔵・研究施 設/千葉県市川市香取)	逓信博物館時代(飯田橋)から当館 にあった資料。来歴確認中。逓信博 物館前島記念室新設時(1955(昭和 30)年11月1日/第6展示室)に遺 族から頂戴した資料群の中にあっ たものか?	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造

4		前島密胸像	青銅像、胸像	長沼守敬か？	別注の台座あり。蝶ネクタイ大。	日本郵便株式会社阪倉ビル1階入口内（東京都港区麻布台）→（移転）→日本郵便株式会社東京支社第35興和ビル1階入口内（東京都港区赤坂）	背面の線刻の書体が、当資料センター2階で保管している着色石膏原型に酷似。関係があるか調査中。 本像は、1972（昭和47）年11月に中央郵政研修所に設置され、1992（平成4）年にⅡ-3の新設に併せて東京郵政局に移設され現在にいたる（口伝）。	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造
5		前島密胸像	着色石膏原型	長沼守敬	着色・青銅色、台座部分欠損あり、銅像と一体型の台座あり、蝶ネクタイ大。	郵政博物館資料センター2階資料室(2)（郵政博物館収蔵・研究施設／千葉県市川市香取）	依頼により当館職員（逓信総合博物館時代）が、市ヶ谷近辺に本資料を受取りに出向いた。以後収蔵庫にて収蔵。	前島密 明治四十年六月二十四日鑄造
6		前島密胸像 〈補綴改鋳〉	青銅像、胸像	会田富康	台座なし、蝶ネクタイ小。	郵政博物館（展示場／東京都墨田区押上）	会田富康が1937（昭和12）年4月に前島男爵（密長男の弥）の命で改鋳。当館に展示されている胸像は、1955（昭和30）年11月1日「第6展示室」を「前島記念室」として遺族寄贈等の資料群を展示した中にある胸像と考えられる。	前島男爵ノ命ニ依リ 密翁ノ像ヲ補綴改鋳ス 昭和十二年四月 会田富康
7		前島密胸像 〈補綴改鋳〉	青銅像、胸像	会田富康	別注の台座あり。蝶ネクタイ小。	日本橋郵便局（東京都中央区日本橋）	銘板に、「郵便創始90周年記念で建之し、1962（昭和37）年4月20日日本橋会・前島会・日本橋郵便局協力会により設置。銅像は昭和12年3月会田富康により補綴改鋳」とあり。	前島男爵ノ命ニ依リ 密翁ノ像ヲ補綴改鋳ス 昭和十二年四月 会田富康 別注台座全面「前嶋密先生」

Ⅲ. 後代に制作された前島密胸像（未調査含む）

No.	画像	作品名	形状	作者	特徴	設置場所（所在地）	来歴	背面等の鉄刻
1		前島密胸像	青銅像、胸像	不明 （調査中）	不明（調査中）	日本郵便株式会社大阪支社前庭（大阪府大阪市北区北浜東）	日本郵政株式会社近畿支社前の〈前島密胸像〉は、上記外の作家によるもの。近畿支社に来る前は、関連施設前にあったものが移設されている。	不明（調査中）
2		前島密胸像 （立体写真像）	立体写真像、青銅像、胸像	立体写真像株式会社（盛岡勇夫開発）	不明（調査中）	日本郵便株式会社北海道支社1階入口（北海道札幌市中央区北2条西）	立体写真像制作工法による胸像。全国に13体あるうちの1つが1955（昭和30）年3月から北海道郵政研修センター前庭に設置。2020（令和2）年に日本郵政グループ北海道支社札幌ビル1階ロビーに移設。出典：（公財）通信文化協会北海道地方本部日より「北のゆう」、通巻79号、2020年12月1日号「北海道郵政研修センターから移設の前島密像除幕式」記事。	（経緯については、（公財）通信文化協会北海道地方本部日より「北のゆう」、2020年12月1日号に掲載あり。）
3		前島密胸像	青銅像、胸像	長沼守敬 （？）	不明（調査中）	日本郵便株式会社四国支社1階入口（愛媛県松山市宮田町）	日本郵便株式会社四国支社1階ロビー。胸像裏面の記録によると、オリジナル像同様1907（明治40）年6月24日。台座表面には「前島密像」と題面があり、裏面には「昭和三十三年十二月建立 郵政大臣田中角栄題面」とあり。	前島密像 明治四十年六月二十四日鑄造
4		前島密胸像	青銅像、胸像	不明	不明（調査中）	日本郵便株式会社四国支社前庭（愛媛県松山市宮田町）	日本郵便株式会社四国支社前庭に前島密胸像新設。四国郵政研修センターの閉鎖に伴う移設。	不明（調査中）
5		前島密胸像 〈複製〉	素材不明、胸像	（オリジナルは長沼守敬）	特殊ポスト上段に設置／Ⅱ-3複製（型取り）	浄楽寺敷地内道路沿い（神奈川県横浜須賀市芦名）	2014（平成26）年10月、前島密没後95年を記念して、「日本郵便株式会社」「日本文明の一大恩人前島密翁を称える会」が作成。当館収蔵のⅡ-3を立体写真像により複製。	台座（御影石製特殊ポスト背面線刻）「前島 密翁 没後九十五年記念 日本郵便株式会社 日本文明の一大恩人前島密翁を称える会 平成二十六年十月
6		前島密胸像	青銅像、胸像	魚谷口保司と読める （背面線刻不鮮明）	不明（調査中）	JR 磐田駅南口ロータリー（静岡県磐田市中泉）	不明（調査中）。中泉奉行を担っていた前島密にゆかりの土地の関係で設置。（Ⅲ-2に様式が酷似、13体のうちのの一つか？）	台座 平成12年1月30日建立
7		前島密胸 〈複製〉	青銅像、胸像	（オリジナルは長沼守敬）	Ⅱ-3複製（型取り）	日本郵政株式会社本社22階前島ホール前（東京都千代田区大手町）	Ⅱ-3複製（型取り）。着色石膏原型（明治四十年六月二十四日鑄造）から型取りをして新たに作成したの。2019（平成31）年4月20日「郵政記念日」に新社屋落成、前島密生誕100周年、前島ホール開所を記念して設置。	台座側面に設置理由記載。

▲〔表4〕 前島密の立像、胸像

（表について）

長沼守敬作品については、本人の銘がないが、大阪芸術大学石井元章教授の調査結果により確定。

（いむら えみ 郵政博物館副館長）